

# 『ブゼラとバティストウータの呪縛と本田選手のステート』の関係



みなさん、連日連夜のTV観戦ご苦労様です。サッカー好きにはたまりませんね！  
しかし今回のワールドカップは、南アフリカの民族楽器ブゼラの音に調子を狂わせてか、強豪国が次々に敗れていく、エキサイティングな展開でしたね。

そんな中で、我々が日本代表は大方の予想を覆してベスト16まで行ってくれました！！パチパチパチパチ！  
そして今回の戦いは日本代表にとって、過去の呪縛からやっと開放された記念すべき大会となりました。  
『え、どんな呪縛？』 お答えします。それは『バティストウータの呪縛』と私は勝手に呼んでおります！

あれは忘れもしない1998年6月14日、日本代表が初めてワールドカップのピッチに立ったとき、迎え撃つ敵は百戦錬磨のアルゼンチン。日本代表は臆することなく果敢に立ち向かっていたのだが、、、、、、、、、、

中盤の潰し屋シメオネから呪術師オルテガに出されたパスがゴール前の名波に当たり、運の悪いことに1番行ってはいけない当時世界最強FW獅子王バティストウータの足元に転がった！！その瞬間、世界は止まり、誰一人として動けない時空の中でバティストウータだけが華麗に宙に舞い、固まったままのGK川口をふわりとかわし、ボールをゴールの方向にチョコンと軽く叩いた。それから0.3秒後川口が再起動を開始したが、時すでに遅く、振り返ったときにはボールは無常にもゴールに吸い込まれていた。ああ無情！

これが12年前のフランスワールドカップにおける日本代表の『バティストウータの呪縛』という悲劇の物語です。世界と互角に戦うには、大和魂だけでは無理で、止まった時の中でプレーできる選手が必要という、世界との距離の遠さをまざまざと見せつけられた残酷な瞬間でした。

『ドーハの悲劇』は教訓として語られるだけですが、『バティストウータの呪縛』はいつまでもイメージの呪縛として日本選手の潜在意識に残り続けていました。ゴール前、1対1の絶好のチャンスでもあせってカいっばい蹴ってしまい、ゴールをはるかにはずしてしまうし、『ピンクの象さんを想像するな！』という人間の脳はどうしても『ピンクの象さん』を想像してしまうように、『キーパーの正面を狙わないでおう！』と思いながら蹴ったボールは見事に『キーパーの正面』に飛んでしまう。

この12年間そんなことの繰り返しの試合ばかりでした。(解説者も絶好のチャンスの場面では、打て～～！！の絶叫解説になってしまう。。。)コレはすべてあの『バティストウータの呪縛』からきているのです。

ところが、ところが、ところが、ついにその呪縛を解く勇者が登場しました！！本田選手です。  
彼のカメルーン戦での非常に落ち着いたシンプルなゴールと、デンマーク戦での視線を外した岡崎へのトリッキーな横パスに、止まった時の中で動ける勇者の姿を発見しました！！ついにゾーン感覚を身につけた選手が登場してきたのです！！

太古、最初に陸に上がった一匹目のカエルを水面から見ていたほかのカエルが『いけるやん！』とあって、一斉に陸に上がって行ったのと同じで、これから日本サッカー界はMFの宝庫からFWの宝庫に変わっていくと思います。

止まった時の中で動ける欧米のトップ選手は、メッシやロナウドのようにボールと一体化して流れるようにプレーする『フロー系』が多いのですが、日本人の場合はヤンキースの松井選手が今年のワールドシリーズで大活躍したにもかかわらず、まったくの無表情だったように、自分のプレイを他人事のように上から鳥瞰しているような『ゾーン系』のほうが活躍できると思います。なぜでしょう？

自分はその原因は国歌『君が代』にあると思います。アメリカやイギリス、フランスの国歌のような血が沸き立つフロー系ではなく、世界で唯一、どこか幽玄さを漂わせた『君が代』、これこそ『ゾーン感覚』を体現しており、日本人の潜在能力を引き出してくれるからです。

これからは『なんか君が代ってノリ悪いよな～』ではなく、日本人を『ゾーン』に導く高貴な調べである『君が代』を再認識していただきたいと思います！！

心理学では心身の状態のことを専門用語で『ステート』と呼びますが、この『ステート』が高みで安定し、それを自らが上から鳥瞰している、高いスキルのスポーツマン、ビジネスマン、政治家が今回の本田選手の活躍をみて、『いけるやん！』とつぶやいて日本を変えていくくれると思います。呪縛を解いてくれた本田選手とブゼラに感謝！ 羽原篤史

